

## 九州方言の特異性（三）

吉町，義雄

<https://doi.org/10.15017/2557130>

---

出版情報：文學研究. 2, pp.95-130, 1932-10-30. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：

# 九州方言の特異性 (三)

吉 町 義 雄

は し が ぶ

本編は雑誌「九大國文學」(九州帝國大學法文學部國文學研究室)第一號(昭和六年九月)及び第二號(同十一月)連載の同表題論文の續稿である。

## 九州方言の文學 (續)

近代日本語開始期即ち室町末期から徳川初期へ掛けてに於ける九州方言文學外國關係資料で問題になる可きものは以上で大體悉した譯であるが、吾人は當然此處に内國關係資料を展開検討しなければならぬ。先づ順序として一言して置かなければならないのは、最も參考しす可き口語・準口語資料の種々ある中に、佛書・漢籍の講義註釋たる抄物に關しては既に新村出博士が「東方言語史叢考」(昭和二年)所收の「足利時代の言語に就いて」(明治三十八年)があり、是に由るに當時の僧侶達は近畿又は西國出身が多く従つて是等の地方の方言が語脈になつては居るもの、

元來が是は潤色された文章語と見る可きものであり九州方言の特異性などは勿論云々出來ないとして、さてその江戸時代に書き直された物であるにせよ純粹口語と見る可き狂言記の用語に就ては是亦夙に吉澤義則博士が「國語國文の研究」(昭和二年)所收の「猿樂の狂言の用語」(明治四十二年)を發表されて居り、是に由ればその成立は謠曲の對話と等しく室町期であつて而も一層濃厚なる京方言口語を骨子としてゐる上に寧ろ東海道筋西部方言の混入影響が認められるのであるから、筑紫要素は矢張り問題にはならないと云ふ事になるのである。

次に古淨瑠璃の用語に關しては、古淨瑠璃三十數篇を收むる「新群書類從」第五「歌曲」(明治三十九年)の「例言」に於ける(八一―九頁)水谷弓彦(不倒)や又此の中の所謂金平淨瑠璃を主として集めた同叢書第九「歌曲」(明治四十年)の例言に當る所に於ける(三頁)幸田成行(露伴)博士は訛語や方言に就て一通の注意はされてゐるが、何れも上方や江戸を中心にしての觀方に過ぎず、地方的方言文學としての意識は存在しない様である。彼の今日九州東北部で行はるゝ所謂豊後淨瑠璃に就ては後の段落に於て扱ふ事にする。

口語資料としての歌舞伎脚本の重要な言ふ迄もなく、只例へば早稻田大學出版部の「元祿歌舞伎傑作集」(大正十四年)二十四編に即しても安田喜代門氏が「高等國語法」(昭和四年初版)に於て(九〇頁)都萬大夫座の「萬歳丸」(元祿七年)に含まるゝ數箇の「まらす(る)」を、雜誌「國學院雜誌」第三十七卷第八號(昭和六年八月)の「九州方言からの一視點」に於て(一八頁)山村座の「傾城三鱗形」(元祿十四)に存する

すればあのお日様のお入りなさるゝ方が西方でござりまつするな

「新群書類從」第三(明治四十一年)四一―五頁下

「元祿歌舞伎傑作集」上卷三六―八頁

の如き實在的國語文獻資料を擧げて居られるのなきは、勿論自分が本論文に於て當初から意圖してゐる九州方言文學の對象として此の場合常態的には扱へない事は最早説明する必要もないと思ふ。僅かな相違ではあつても是等が若しも十八世紀の後半當りになるまで大分その存在意義が變つて來るのであるが。

吾人の求めてゐる九州方言の特異性に就て念の偽改めて此處に前置をして置く必要を感じる。それは數箇の地方的局部的語彙なるものは、例へば雜誌「方言」に於ける顛原退藏氏が「江戸文學難語考」(第一卷第四號、第二卷第一・七號既出)の如き努力は勿論尊敬す可きだが、方言文學の標識としては危険であり、只隨所に頻出する「御座る」や「申す」口調は其れだけでは目下の對象にはならないと云ふ事である。諸方に散見する「てや」「げな」等の語尾も吾人の目的とする西國語としては認容し難いのである。活用語の顯著なる差異と共に助辭の微細なる特徴を筑紫要素の標識として尊重して貰はなければならない。古く雜誌「帝國文學」第拾六卷第四(第百八十五號、明治四十三年四月)所載の論文「關東べい」に於て(三十一頁下)保科孝一教授は

(略上) 足利時代以降は、狂言記をはじめとして、口語の資料が漸々あらはれて居るが、然しながら、其口語たる

や、大抵關西方言か、九州方言に屬するもので、關東方言の屬するものが殆んどない

と書かれたが、抑々終止形助動詞「べい」は似而非なる「西國ばい」——自分は斯く呼び度い——なるものは語源的に考へて本州方言の強勢語尾助辭「わい」に相當す可き事は兎も角、此の方言標識の完全なる指摘列擧が膨大なる徳川期文獻に於て如何に困難、否、勞して効なきかは自分なきが今更の様に云々する迄もないであらうし、古文書や古寫本類の博搜迄は暫く措いても、是は文運隆昌を極むる現代の出版物に於て矢張軒輊が無い有様なのである事は是

亦繰返す迄もあるまい。

徳川期文學の翻刻物は原本の一割位しか無い様であるし、又完全なる調査なきは敢へて諸事不便な田舎住居ならずとも一箇人の力に到底望まる可くもないのは自明な事であり、更に自分が目下企圖する言語事實の蒐集配列なるものが分量的には極めて負擔が軽いにも不拘餘程の興味と機縁とが揃はなければ決行され難いのであるから、今後同好者の出現と教示とに由つて漸時完璧に近付くより外ないのは勿論にしても、永年の見聞と努力とを有せざる自分が斯かる事を書くのは大に氣がひけはするが、今後殘餘の原本を悉皆忠實に檢して見た所で、吾人の論究對象となる可き資料は以下へ羅列出來たもの以外には最早殆ど存在しないに極言しても大過無いのではあるまいか。尤も此の主として坊間刊行物に即する筑紫言葉の拙き羅列の物足らなさは、將來當然根本的に完全な整理の行はる可き國語史上の一課題である限り、何れ無くては適はぬ捨石の一として勿論識者の寛容を乞はなければならぬ。以下自分は時代を経る種類を緯して上方・江戸兩文學に於ける九州方言文學資料を逐次配列するに當り、所謂筑紫言葉と西國語とを稱するのは何れも殆ど九州西北部地方の肥筑方言に限られて居る上に大部分は他國人の拙劣なる模倣であつて嚴密なる國語史の研究對象とは成り兼ねるであらう事は固よりながら、此の代表的西國語さへもが本州諸方言に伍して其の寂寥たる影に再嘆三嘆せざるを得ない次第である。

小説に隨筆に多く筑紫の天地を題材にした井原西鶴が若しも此少なりとも西國語を——二三の地方的語彙でなく——採録して作品に混じた所で、その古典的本質を傷けようとは考へられないが、獨り浮世草紙と言はず上方文學に於ける都久志言葉の影は餘りにも淋しい。後世に結集された俚謠なきも眞にその郷土的方言味に酔ふ様な人々は殊に

中央の都會には殆ど存在しなかつたのであらう。そこで吾人はその藝術的價値は暫く問はないで、當時物された方言歌一首に先づ一瞥を拂ふ必要が生じて來るのである。

それは蕉門十哲の一人なる森川百伸（許六）（明曆二（一六五六）生）（正徳五（一七一五）歿）がその年次は不明なのであるが、長崎來遊の硯に該地方言もて詠んだ短歌があり、是は現在では「長崎地名考」（明治卅六年）の著者なる明治初年に歿した香月薫平の遺稿「長崎古事集覽」なる手寫本に書留められてあつて、此の手寫本は古賀十二郎氏に由る（私信）目下所在不明なる香月氏遺族の手許に保管されてあるのであるが、即ち

あまたちの　じゆつたんぼうで　ぎんくこる　あらよそわしか　おんだいやばい

なる一句は、本山豊治（桂川）氏も例へばその「長崎花街篇」（昭和二年、春陽堂）で拾録更には語釋（三四一—二頁）をされてゐるのである。

竹本座に據つた巢林子近松門左衛門事杉森信盛（承應二（一六五三）生）（享保九（一七二四）歿）の著作に關して、例へば岩波講座「日本文學」で佐藤鶴吉氏が「近松の國語學的研究」（昭和六年十二月）の如き試は今後餘々に併し當然方言へも手が及んで行く可き物として、さて作者五十二歳の時の世話物「源五兵衛（源五兵衛 おまん薩摩歌）」（元祿十七（一七〇四））には薩摩者の菱川源五兵衛を始として幾多の九州人が活躍して居るが、彼等の口の上るのは皆今日所謂普通語であるから言語的的地方色は浮出て居ない。時代物たる「百合若大臣野守鏡」（寶永七年（一七一〇））「天神記」（正徳三年（一七二三））「母は日本國性爺合戰」（正徳五年（一七一五））「傾城島原蛙合戰」（享保四年（一七一九））さては「日本武尊吾妻鑑」（享保五年（一七二〇））なき何れも舞臺人物共に筑紫に關係してゐるが、九州語に就ては何等の細工も施されてないのである。

享保三年（一七一八）十一月に上演された晩年の作「博多小女郎波枕」上卷二箇所に見える毛剃九右衛門の長崎訛は、京都生れの宮古路豊後掾に由つて如何なる節廻を以て語られたかは兎に角として、幾多の人士の口に筆に何回もなく指摘引用されて來たのであるが、單なる二三の地方的語彙なきではなく根幹的活用語尾は固よりの事ながら「ばい」「ばん」「たん」「けん」「くさ」等の重要な標識なる助辭が十八世紀に至る迄記録されなかつた、少くも他の文獻には傳存しなかつたこと云ふ事實は随分考へさせられると思ふ。言語生活の複數性の中で最も純真なる最も固着せる姿は當時を去る百有餘年前の南蠻人の耳には當然人つて居ても、更には口にはさへ上つては居ても、標準語の彈壓力の下には、或は恐らく知つて知らぬ顔して、遂に眼へ残る機會は無かつたのである。想像されまいか。問題は九州西北方面に限つて見ても、彼の「日本風土記」の倭寇が傳へた郷談俗語と此の巢林子が筆に留めた海賊の絶唱とを結び付けて味讀する時、獨り東海島嶼國と云はず、所謂訛語が俚語が國語史上に於ける地位と價值とに今更の様には嗟嘆せざるを得ない譯である。此の淨瑠璃に記された所謂長崎訛も上方文學に於ては無論の事であるが、比較的には資料の賑かきなる江戸文學に於ける非九州人の模寫した所謂西國語に比しても、時間的には同じく一世紀程の空白を有するにも不拘、頗る現實味を帯びて居る點は大に注意を要するのであつて、巢林子が其の幼時を肥前唐津で過した事があること云ふ史實證據にも案外有力な傍證を加へられようし、少くも肥前邊の方言には可なり密接に關係を有する機會があつたこと考へられる。宮森麻太郎氏やロバートニカルズ氏の努力になる「近松傑作集 日本の沙翁」（一九二六、倫敦、英文）中の英譯（二六七―七〇頁）なきでは問題にならないが、新村博士が「東方言語史叢考」所收の「國語に於ける東國方言の位置」（明治三十八年）で「せない」「ならぬ」等の東國語法を指摘される（二六

四頁）態度を今若し更に進めること、上田萬年博士及び樋口慶千代氏の「近松語彙」（昭和五年）は勿論非難は無いにしても、そよ波音船影に、心を付ける蚤取眼、物案じ類も頬ついたる時は荒々しい「ばい」も、顔色打解けて、船中の淋しさを紛らす頃には何時しか愛嬌の籠る「ばん」「たん」の頻出は、その微妙なる心境の變化と共に、織細に感じ分けなければならぬのである。竹田出雲が「双蝶々曲輪日記」（寛延二年）は西國語に全く無關心だ。

翌享保四年の八月に同じく竹本座で上演された同人の「平家女護島」は大體が時代物ではあるし、此の第二段に出る三箇所の千鳥の海女言葉なごは、實は三年後同人が同所で上演させた「唐船嘶今國性爺」（享保七年）の劈頭に見える「十三省」の唐音程の正確さは勿論有して居らず、又斯かる事を吟味す可きではないことはしても、鬼界島の世界へ當時に於ても薩摩訛——而も得體の知れない——を以てする事の可否を論ずる野暮は實は目下の立場では大に歓迎しなければならぬのではあるが、九州方言史に於てすら南部のものは其の眞に躍動せる生活を此の頃には未だ未だ文字に寫して後世に傳へる機運に恵まれなかつた消極的の事實として記憶尊重される可き性質に屬するものなのであらう。實にその文樂の傳統に本質を犠牲にして當て込んだ食滿南北氏作詞、鶴澤友次郎氏作曲の「三勇士譽肉彈」は地元では廿九日間大入を續けさせたと言はれるが、雜誌「演藝畫報」第二十六年第五號（昭和七年五月）に於ける石割松太郎氏の批評（四三頁）の様なものは今後も枚擧に暇があるまいが、流石に筑紫路巡業の際（昭和七年六月）だけは臺本には全然無い筈の「無か」「好かばい」なる片語がそれも漸く一回宛若手の大夫に由つて發された——人々は是に寧ろ一種の滑稽を感じた——のを思ふと、世にむつまじい陸言に少しならず長刀ではあつても、「可愛か」「仰す」「申す」等の薩摩訛りを曲なりにも示さうとした二百年前の菓林子の如在なさには同じ座で上演された竹田

出雲の「大内裏大友眞鳥」(享保一〇)や「菅原傳授手習鑑」(延享二年) なぎを想ひ出すに實に敬服せざるを得ないと思ふ。因に毛剃の長崎訛りも何時も對に引用される是は豊竹座で上演された彼の烏亭焉馬等が「碁太平記白石嘶」(天明七年)の奥州訛りなきも、此の海女言葉から胚胎してゐるのかも知れない云ふ説が木谷正之助(蓬吟)氏の「大近松全集」第五卷(昭和二年)に(二四八頁)見えてゐるが、如何なものであらう。

西ミ呼ばれた竹本座に對して同じ大阪で東ミ稱された豊竹座に據つた紀海音事榎並善八(寛文三(一六六三)生)の作品の地位や價值は敢へて黒木勤藏が「近世演劇考説」(昭和四年)所收の「紀海音作品考」(大正十五年)なきに由らないでも想像はされるが、その「傾城國姓爺」(正徳三年) (此の年次は勿論もつゝ後へ繰り下げる可きであるが)や「吳越軍談比翼臺」(享保六年)に於て同じ頃迄の巢林子が用ひた架空的な鬼語、唐言葉、唐人語、唐語の模倣と思はれる物を些少混じた趣向も同じ様で又變つた試が吾人の探し求めて居る九州語に關して摘發出來るのであつて、何れも「日本文學講座」第十六卷(昭和三年四月)及び第十八卷(同七月)の「紀海音研究」(改訂新版第十卷所收、昭和六年七月)では格別問題にもされて居らぬ様な作品を引合に出さなければならぬ。「神功皇后三韓責」(享保四年)で劈頭に飛び出す門司が關に住む無筆の猿手と稱する船乗なき位では如何にも扱ひ様が無いであらうが、翌年の「鎮西八郎唐土船」(享保五年)では讃岐高松の温泉宿に於て郷代官並川源藏が落人を詮議する時亭主の長兵衛が聲を受けて傭人達が

だてな風俗繪圖に替らぬ丁稚をつれて、毎日八ツの前後湯に入るは上方者も九州共、詞付が紛らはし  
 答へて居る直ぐ後へ

あいこ返事へんじも後あとや先

筑紫育のして、ん奴んぬに身を窶くたした爲朝が丁稚姿の重仁親王に轉ぶなま勞るに應じて

ナイないく

なる返事をさせて居るのは此の場合頗る味があるのであつて、更にその道行で始は小ざつまこざつまこ假稱する琉球女もうきんが日本ぐちの筆法や、同じく時代物「玄宗皇帝蓬萊鶴」(享保八年)第三段に於て玄宗帝が先年安部仲麿に案内を聞いて置いた日本へ漕渡り、長崎の丸山いんらふ色比いろくらの唐風呂沸かまがらき云々い空想に耽る所で、楊貴妃が寢起き姿に種々装させて

ござんす混りまじりの茶の挨拶あいさつ

なき云ふ文句は、殊に同じ座で上場された並木宗輔・丈助の「菫萱桑門筑紫轅」(享保二十)なきを想起して、彼此對照するま湧然たる興味に包まればしまいか。

「日本文學講座」第二卷(大正十五年十二月)及び第四卷(昭和二年二月)の「日本文學の言語學的考察」(改訂新版第一卷「日本文學總說」所收、昭和七年一月)で保科孝一氏が言はれる如く(第二卷一三頁新五七頁)

(略上)元祿ごろまでは、文學が京阪地方の方言を基礎きそとして發達し、關東方言はあまりこれに與らなかつたのであるが、その後江戸文學が關東方言の上に發達するに従つて、各地方の方言が自由に使いこなされるようになって居るし、關東の田舎者もまた然りである。

た。東海道中膝栗毛や木曾道中等を見ても、脚本や輕口ばなしの類を見ても、九州の田舎武士はその地方語を用いて居るし、關東の田舎者もまた然りである。

九州方言の特異性

可きものであり、今後様々の實例は人々に由つて幾多指摘され得るであらう中にも、自分の眼に留つた探華亭羅山(生歿不詳)が「輕口浮瓢箪」(寶曆元年一七五一)卷之五の「言葉ちがひ」に見える「賣米」うればと「賣米」うればとに利かす口合なきこそ、品位の點では兎も角として其の時代や内容を考慮に入れる時、彼の安樂庵策傳が「醒睡笑」(元和九年一六三三)(稿)卷之五にある「人はそだち」の劈頭に記される「濃う良う」と「紅葉」に掛ける洒落に勝る誠に興味津津たる資料であつて、例へば吉澤博士が「國語說鈴」(昭和六年)所收の「東西兩京の言葉戦ひ」(昭和二年)や同じく「國語史概説」の「七 東西二大方言の競争」なきへは是非採録されなければならないと思ふし、更に保科教授が「日本文學の言語學的考察」(「日本文學講座」)に於て(第四卷三六頁版八〇頁)

(略上)關東方言には促音、關西方言には長音が發達し、これが二大方言を區別するもつとも著しい特徴になつて居るが、これはつまり地方民の氣象の相違ちがひに原もとずくものである。(略中)優雅な氣風は長音により、剛健な氣象は促音によつて代表されたものであらう。九州地方の言語にも促音のおういに發達しているのも、やはりその氣象において關東に似通つて居るころがあるからである

と述べられる觀察なきを想ひ合はせ、抑々筑紫方言は東西何れへ加擔す可きものであらうか考へ出すに、何人に取つても面白い論題が生ずる事になりはしまいか。

次に關東方言圏内の一角地に育つて今後重要な新興指導勢力となるのみならずやがては日本全國の規範標準の地位に迄登る混合方言「江戸言葉に就て」は夙に保科教授が雑誌「東亞之光」第四卷第十二號(明治四十二年十二月)及び第五卷第一號(同四十三年一月)に於て論述されて居り、自分は斯くて吉澤博士が前掲論文「東西兩京の言葉戦

ひ」(「國語説鈴」所收)で記さる、(二四一—二頁)

(上) 江戸方言と京方言との地位は、前の上方文學に於ける反對にならなければならぬ筈である。一九の東海道膝栗毛、三馬の浮世風呂なごでは、京方言は正しく他の田舎方言と同様に取扱はれて、江戸人のお笑ひ種に用ひられてゐる。冠履はこゝに轉倒して、京方言は嘗て江戸方言に加へたところのものを以て報いられたのである。云ふ叙述を拜借して、直に以下の前置に換へる事とする。

江戸文學に於ける九州方言は先づ蜀山人事大田直次郎(寛延二(一七四九)生(文政六(一八二三)歿)の數首の狂歌から始まる。彼が文化六年(一八〇九)八月四日に長崎の立山で詠んだを自ら記し且語釋さへしてゐる所の

此池は さんくもなかね ばつてんかし こまか鮒も 出うきもする

は「金曾木」(「新百家説林」三)に記録されてある(七二四—五頁)から確實な創作であるが、

長崎の 山の端に<sup>づ</sup>出る 月はよか こんげん月は えつみなかばい

わりたちも みんな出て見ろ 今夜こそ 彦山<sup>ひこさん</sup>やまの 月はよかばい

の二首の方は古來人口に膾炙されて居り、例へば大庭耀<sup>よ</sup>氏の「長崎隨筆」(昭和三年、郷土研究社)なきにも収録されて(二二七—八頁)あるが、蓋しその「一話一言」<sup>いちわいちごん</sup>卷二(「新百家説林」四)に於て(七一頁)「物類稱呼」に含まる、方言歌を悉く抽出してゐる様な當時の方言ファンとしては當然あり得可き事柄と世評に上されようもの、此の二首は蜀山人全集たる「新百家説林」には所謂拾録されざるものに屬する云ふ點だけなら格別問題はない。此で、實は肉筆の所在が全然不明であり、傍々其の眞偽も頗る怪しい種類のものであるらしいのである。それにして

も彼が様々の變名を以て盛に關係した洒落本には一九や三馬に負けず各地の方言が巧に寫されてゐるのに、西國語は矢張り全然見當らないのを想ふに、是等數首の方言歌は兎も角記憶さる可きものであらう。彼の所謂「長崎ばつてん」は實に彼に於て初て出現を見るのではないか。

川柳狂歌が散文化されたことも見做す可き黄表紙を看過無視する氣は固より毫もある筈がないのであつて、その總數約二千を算へられる作品の中で、代表的の約三百がやがて「校黄表紙代表作選」にして江戸時代文化研究會から翻刻刊行を完了した曉は尙の事、恐らく是以上精彩ある西國語は先づ見られまいに信ずる實例を一つ提供して此の難課題を我ながら巧妙に切抜ける事にしよう。通笑事市場小平次(元文四(一七三九)文化九(一八二二)歿)の「近頃島めぐり」(安永九年(一七八〇)は小林三郎平なる男が朝夷あさひなに會つた後各種の珍奇な島を巡る筋であつて、博文館「續帝國文庫」第三十四編「校黄表紙百種」(明治卅四年)及び國民圖書株式會社「近代日本文學大系」第十二卷「黄表紙集」(昭和二年初版)へ翻刻所收されてあるが、此の作の寓意は元來何處へ行かうとも江戸程結構な土地はあるまい云ふ事であらう)續帝國文庫本校訂者が解する(一二二頁)のは兎も角として、此の三郎平が手長島において矢張り興味索然たる餘り

此國このくにはもふ氣きがなか橋おほしだ

續帝國文庫本一一七頁

近代日本文學大系本四〇一頁

と言ふ所がある。即ち作者は單に「氣が無い」に「長橋」を平凡に掛けたのであるが、知らず、百五十年の今日自分分は不知火の筑紫國に於て此の天與の珠玉を有難く拜領するのである。

洒落本五百篇の中には解釋の仕方により内容的には滑稽本ミ區別のつかないものが多々あるにしても、その大部分は江戸時代文化研究會等の努力により今や研究繙刻され終つて、可なり様々の事が言へる譯になつたのであるが、所謂代表的傑作に於ける九州方言存在の有無なきは勿論問題にならないとして、文學的には何れも寧ろコンマ以下の作品に瀧むであらう變態的西國訛なるものが仲々得難いのであり、否、更に例へば吉澤博士がその「國語國文の研究」所收の「尾張名古屋方言で書かれた洒落本ミ中本ミを紹介して」(大正十五年)に於て(五三九—四〇頁)

江戸時代の西國武士は、少からず洒落本資料ミなつて女郎衆の槍玉にあがつてゐる

ミ云ふ様な事は誰にも言はれ又想像されるが、抑々實に所謂標準語を語る田舎侍に於てさへ西國生れは矢鱈に出現してゐない様である。唐來三和事加藤源藏(延享元(一七四四)生)の「和唐珍解」(天明五年)に於て日本語は江戸言葉のみしか見られぬ不服を言ふのは「放送講義集・九州方言講座」(昭和六年五月)の「九州方言の輪廓」(九頁)が恐らく最初にして最後であるかも知れず、森羅萬象事森島中良(寶曆四(一七五四)生)が「眞女意題」の自序で「豊後のモサ」は固よりだが、降川子事西村定雅(寶曆七(一七五七)生)の「養漢裸百貫」(寛政八年)に於ける姓名だけの長崎傳七は當然ミしても、紀橋柳下(生歿不詳)の「名所拜見」(寛政八年)の(稿)や天狗山人事芝晉交(生歿不詳)の「品川楊枝」(寛政十一)には薩摩者が出るが、前者では腰掛けて居る二三人の薩摩侍の一人が茶屋娘のお菊に向つて只一回

コフおきくさんその様にあくせくせずミちつミ御休なさらぬか

ミ言ふのみであり、後者では女郎のミらミ文朝ミの間に「芋客」云々ミ影で噂されて居るだけであつて、何れも片語だにお國訛は記録してない以上、實在する中央の資料では次の二作品を以て満足するより外仕方があるまい現状なの

である。

六合館の「洒落本大系」(江戸時代文化研究會)第四卷(昭和五年十一月)へ「鬮刻所收された行成山房大公人一名雲中含山蝶(生歿不詳)の「公大無多言」(天明元年)に出る西國侍の言葉は平凡な標準語で通してゐるのであるが、只一箇所自分はそのお國訛を覺しきものを發見した。それは此の侍が全部十回口を利くが第三回目「吾妻庵通雷に對して發する一條の終の方で

さだめてさうちの通人はおもしろいことなるへい。

大系本第四卷五九三頁十二行

こあるのが見逃し難いのであつて、總じて洒落本も其の性質上勿論だが此の作品は濁點を振つてない所が多々存する上、大系本の鬮刻及び後から(昭和七年)配布された正誤表に由つても、此の「へい」は動きの無い所を受け取つてよからうし、然る限り是は當然西國語助辭の「ばい」の大に在る可くして而も容易に得難き片鱗を解す可きであらう。作者自身は所謂「もさ言葉」(「申す」を用ふる意)として言語上では東西南北の識別をせず「關東平」を同一視してゐるか否かは、此の場合自分の主張に少しも動搖を與へない。他の作品に於て敢へて珍らしくもなかる可き淺黄裏が思はず洩らす「べい」を恐らく實は同一物であらうにも不拘、作者が明らかに最初から西こく方の生れを見えてを限定して呉れてゐる所を實に捨て難しきし度いと思ふ。斯く見る時此の侍が第九回目「今度は食客の平樂に答へる所で

通こやらになつて浪人のいたしたら

こあるのも、他の場合に多く散見するのこは違つて非常に生きて來るこ思ふのである。

同じく「洒落本大系」第八卷（昭和五年十二月）の「解題」で山崎麓氏に（二四頁）

（略上）上方の洒落本の振はぬのもこんな骨惜みの作者が居るからである

こ評される一人に算へらる可き金太樓（主人）一名桃尻山人（生歿不詳）の「花街くわあひ（裏紙）（裏紙）滑稽こっけい一文いちもん傀くわい」（文化四年）に珍らしき九州者の言葉の存する事は、「日本文學講座」第九卷（昭和二年八月）の「方言研究こ方言文學」（改訂新版第十四卷所收、昭和七年十月）に於て（一七七頁）東條操氏に指摘されてあるが、此の作品は洒落本こ云ふよりも滑稽本に近く殊には劣作たるの故を以て勿論春陽堂の「洒落本集成」には拾録されざるもの、一つであつて、六合館の「洒落本大系」にも漸くその「續刊」第一卷へ翻刻される事こなつた。編纂者の一人なる高木好次氏の原本調査書抜の御教示に由るこ、三五兵衛及び八右衛門なる二人が僅少の所謂西國語を弄するのであるが、「あんがい」「こんがい」「しちより」位の外に「申す」を頻發して居るだけでは、實在性や巧拙は暫く措いても、必ずしも九州辯こ見倣こ可こき程のものではないのであつて、只その歌になる所で

よ。か嫁をもちやつた

こ云ふ一句が、此の作品の資料價值を吾人に高めて呉れるのである。

十返舎一九事重田貞一（明和三年）（二七六）（天明三年）（二八三）（生歿）に至つて、以後總じて滑稽本なるものは些少ながら兎も角資料こ興味ここだけは吾人に興へて呉れるのである。その餘りにも有名なる「東海こ中こ膝栗毛」全八編は享和二年（一八〇二）から文

化六年(一八〇九)へ掛けて物された上、所謂「發端」<sup>はじまり</sup>は文化十一年に追加され、「續膝栗毛」全十編は文化七年から文政五年(一八二二)に互つて著されたのであるが、抑々是の中に含有される諸國方言の實在性に就ては、東條操氏も「日本文學講座」第九卷(昭和二年八月)の「方言研究ニ方言文學」(改訂新版第十四卷所收)に於て(一七五頁)

最初はほんの滑稽の材料に使つた方言も、終にはいゝ加減ではすまなくなつたものが見える。一體に云ふに滑稽本でも洒落本でも、卷中の方言は多くは机上の作で、あまりあてにならないものが多い、しかし膝栗毛は是等の中ではかなり忠實なもので、之は作者が實際旅行した結果であらう

とされて居り、更に一層細かに検討する時には、例へば「日本文學講座」第十五卷(昭和三年三月)及び第十六卷(同四月)の「一九研究」(改訂新版第十卷所收、昭和六年七月)で藤村作博士が東條操氏の言として引用されてゐる(第十六卷三一頁<sup>新</sup>版)三二七頁)

膝栗毛の方言は東海道中京阪の分はまづ正確なものであるが、他國の分は可なり怪しい

と云ふ批評なき、九州在住以來五年に垂する此の頃でこそだが、東京で生れて十數年、東海道筋を経て以後京阪神間に同じく十數年の生活經驗しかない自分なきには、正直の所隨分權威のありさうな論結み感じられてゐた。更に東條氏が「國文學者一夕話」(昭和七年七月)に於て(八一頁)爲る、

卒業論文に「方言資料として見たる東海道中膝栗毛」を云ふ題を選んだのは今から考へるにその選定そのものが既に滑稽であつた、方言研究を志しながら臨地の實地採集を試みず材料を膝栗毛なきに求めたところ、認識不足

で落第ものである(略下)

ミ云ふ告白に對して、殊には三田村玄龍(鳶魚)氏の「東海道中膝栗毛輪講」三篇(大正十五年——昭和五年)なきの  
手前口はばたいが、あらずも哉の私見を追加させて貰ふに、一九の方言なるものには時に彼の越谷吾山の「諸國方言物類稱呼」(安永四年)の  
みを材料として繋ぎ合はした手法痕跡が想像されるのであつて、少くも尾崎久彌氏の「江戸軟文學考異」(昭和三年初版)所收の「十返舎一九の旅程」(大正十五年十二月)に由れば(二二四頁)不詳ではあるが若干の實感があつたかも知れない西海道に關して、明らかに此の細工が看取されるのである。是は強ち「東海道中膝栗毛」後編(享和三年)の凡例に暗示は得なくも強硬に主張し得る一二の例が擧げ得られるのであつて、直接採集に多大の不便を感じたであらう西國語に於ては當然な事であらうし、是が爲に右の凡例の中で記してゐる

驛々風土に隨て音律に清濁の差別あり(略下)

なき云ふ事は誰にでも相當豊富な語例を有する體驗ではあつても、例へば東北辯では執拗に「いぐ」(行く)ミ出してゐる面白味が九州訛の「なし」(何故)には全然缺除してゐる様な片手落が存するのであらう。尙本誌前輯拙稿「物類稱呼西國方言索引」を参照され度い。

「東海道中膝栗毛」全八編中で九州方言の出るのは只一二箇所しかないのであつて、六編(文化四年)上編で伏見から大阪へ行く八軒家舟の中で乗合の人々が隱藝を行ふ時に長崎の人が合計七回程所謂長崎辯を使用してゐるだけである。江戸文學の小説に於ては最初の水準的西國語の出現ミ云ふ様な修飾句は勿論保留して置いた方が安全であらうが、長崎方言ミして受取る限り、「うんきも」(是は「汝共」を意味するのである)は「おんきも」(俺共)でなければならず、

「よんによう」(肥後北部なごでは孤立的音聲現象の一として立派に實在するらしいが)は「よんにゆう」でなければならぬのである事を注意し度い。

「續膝栗毛」全十編に於ては四箇所に西國語が存在してゐる。そして最初の二箇所は宮嶋參詣に於て記され何れも侍が出て居り、最後の二箇所は善光寺道中に於てであつて、即ち次の通りである。

二編(文化八年) 上卷に於て彌次郎、北八の兩人が備後の鞆たづの湊に泊つて遊女町を冷見し饅頭屋まんどうやと呼ぶ遊女屋へ引ずり込まれた時、隣座敷に居合はせた西國侍が振られたのを怒つて所謂九州方言を二回許り驅使するのであるが、多少の假名遣の差異を除くも、語彙は悉く「物類稱呼」(本誌前輯)から借用したらしく、かく考へるにその如何にもわざとらしい西國語の組合せから生ずる滑稽には再讀三讀嘖飯せず居られない。

同じ二編の下卷では宮嶋の旅籠屋に丁度泊り合はせた二三人の西國侍が、定宿なるに不拘自分達を彌次郎、北八よりも扱を後にしたと云ふ點へ擲んで、亭主に當り散らすのであるが、その約九回發するお國手形は「ていす」(亭主)や「没落」位の語彙に於て示した音聲描寫を除いてはよい加減なものであり、數回宛見えてゐる「ケニ」「テヤ」なる助詞はさうも感心出來ず、是は「よかばい」「なかばい」を頻出する手前からも「ケン」「タイ」もしなければ不自然であつて、さも無ければ亭主を始とする中國辯べん區別が付けられまい。「いたいて」(致して)もしない所なきは勿論の事だが、「ならない」「せない」等の東國語法も此の場合非常に不用意に感じられよう。

九編(文政二年) 上冊で大町宿附近の村外れの茶店に於て肥前唐津出身しんと稱する修業者が十回程唐津辯たる可きものを口にしてゐるのであるが、是は一九の膝栗毛中でも分量最も多く、内容的にも彌次郎、北八の外に茶屋の老夫婦の

辯舌が加り「東海膝栗毛」六編のものと共に賑かな場面である。「ふこか」(大きな)云ふ語彙は使用出来ても「ちつさうても」(小さくても)なき云はせてゐる點位を除く、殊更新に非難す可き所は餘り無い様だ。

同じ九編の下冊では善光寺の旅籠屋で西國同者廿人斗が所謂肥後辯を二回許り語るのである。恐らく偶然許され得るかも知れない「よんによう」(大分)位を除いては大分非難があらう。「あながい」(彼)「こんがいの」(是)は「あぎやん」「こぎやん」になければ可笑しからうし、頻出する中國式の助語「でや」は若し實感のあるものなら「たい」の思ひ誤り解す可きであらう。

一九の「方言金草鞋」の初編は文化十年に著され、以後廿數篇に互つての刊行年時と内容筋書との諸本異同問題は尾崎久彌氏の「『金草鞋』の編次に就て」(「江戸軟文學考異」所收)で詳説されてあるが、抑々此の作品は鼻毛延高き千久良坊と稱する奥州生れの二人が全國を旅行する膝栗毛物ではあつても、元來が合巻本である爲、題名の角書に似合はず殆ど方言文學の引用資料にはならない程平凡な文體を以てした淫猥な小冊集なのであつて、況や手並の知れた一九の西國語なきを強ひて求める必要もない様なもの、博文館「續帝國文庫」の「一九全集」(初一十三編、明治卅三年翻刻)及び「續一九全集」(十四—二十四編、同卅四年同上)では丁度意地悪く大阪から海路金毘羅を経て長門に着き宇佐八幡宮から陸路山國川に沿うて長崎圓山町に至る原本四編三十丁分の西海道部分を全く削除して居るので(尾崎氏前掲論文参照)、念の爲尾崎氏にその御家藏本(廿四編物)を詳細に檢して戴いた所、寧ろ意外にも此の四編(文化十一年の出版を考へられる)には長崎遊興の條に於て女郎又は幫間の言葉として左の様な九州語が載せられてあるのである。

うんごも、おこもして、かみがたさなへづらんばいか、よか〜

いかなちうつろばつてんから

ぼうぶらまくらにへこいて、そこねいこ、ねいづりさるき

おきやくさまがた、すねふりごもにづらんばい

「物類稱呼」に見える所謂西國語(本誌前編(拙稿参照))を引抜いてお茶を濁したに過ぎない事は、最早自分の指摘する迄も無いであらう。因に最後の巻たる廿四編又は廿五編の西陸道は原本にも矢張り筑紫言葉は全然見當らないさうであるから、右に示した四回分の面白くもない人造九州語を除いては、「金草鞋」通讀は吾人に取つて全く「無駄修業」なのである。

同様な趣に於て同人の滑稽本「於ごけ(淨るり)方言競茶番種本」(文化十二)は、原本所持者なる顛原退藏氏の御教示に由り、恰も當時流行した茶番の種本用に繪入を以て滑稽なる話を盛り込んだのみであつて、此の方は又方言資料なるものは全然見當らないのである。

然るに同じ一九が合巻本の「忠臣狸七役」(文政十一)ではその得意の方言通を盛に振舞はしてゐるのであつて、筋は狸が種々の役者になつてゐるのであるが、上欄にある「忠臣藏鸚鵡石」に於て假名手本忠臣藏の淨瑠璃の文句を各地の方言に翻譯して示して居り、九州に關係しては小の定九郎には肥州ミシとして肥州辯を、原郷右衛門には肥前ミシとして肥前辯を語らせ總計二百語可なりの長文であるさうだが、その一斑は雑誌「文藝春秋」第十年第九號「涼風讀本」(昭和七年七月三十日夏期臨時増刊)の尾崎久彌氏が「九州方言の小説」に於て(一四―一五頁)窺ふ事が出来る。勿

論お定りの彼一流の變態西國語である。

初代一九の膝栗毛は所謂膝栗毛文學とも稱す可き夥多の模倣類似物を産んだ中で、頭陀樂雲水(生歿不詳)の「奥九おんくの人井中ひとゐらなかの水みづ」(文化五年一八〇八)は「新群書類從 第七 書目」(明治三十九年)に於ては大久保豊(葩雪)により年次不明の洒落本しやらくとして(六三四頁)竝べられたが、「江戶軟文學考異」所收の「膝栗毛物の研究」(大正十五年)に於ては尾崎久彌氏に由つて解題もされて(一七三—四頁)ある。即ち洒落本しやらく云ふよりも滑稽本しやきほんに屬す可き此の作品の題名は田舎の粹すいに通はせたものであつて、内容は九州及び奥州おくしゅうと呼ばれる二人の旅人が京見物をして滑稽を演ずる趣向であるが、此の九州男の言葉が吾人の求める方言である事は尾崎氏が雑誌「民俗藝術」第壹卷第拾貳號(昭和三年十二月)へ投稿された「膝栗毛物せきりもものと俗藝」に於て(五二—三頁)察せられ、此處に抽出された一斑から推しても此の作者は九州方言に關しては一九よりは遙に體驗が深いらしい様である。

同じく中央で物された膝栗毛物の一つとして擧ぐ可き物に、「片言田舎講釋」(文化十二一八二五)の作者なる東里山人事細川浪二郎(寛政二二七九〇生 安政五二八五八歿)が滑稽本「田舎たがや驛路やくろの鈴」(文化八年一八一—二)は、當時の一江戸人——此の作者を謂ふ——が認識してゐた所謂九州語の一標本ひょうほん云ふ意味に於て、是亦彼の棹歌亭真樹事林主水(生歿不詳)が「下愚げぐ鄙辭びし」(文化七年一八一〇)の如き作品よりも、目下の吾人に記憶さる可き資料であらう。雑誌「文藝春秋」の尾崎氏が前掲論文に於ける引用例(一五頁)を見ても分る通り、漠然たる「もさ言葉」を使つて見たいなら此の作品の文學的價值を高める爲に、作者は「爰こゝに九州の傍示たがや杭かたはづれに」を宜しく「爰こゝに奥州の傍示おくしゅう杭かたはづれに」に限定す可きであつたのだ。抑々實は殊に江戸在住者に間違ひられ、否寧ろ無視されたであらう西國の「ばい／＼」言葉なるものは、更に今少し吾人が興味きょうみと餘裕じよこと

を是に貸す時、博多では並存的に「べい」ミ出る——外形だけでは全く東國方言ミ異らない結合さへ屢々生ずる——言語事實を今此處で意識中に入れても入れないでも、「和唐珍解」に於ては暢氣な筈の東京人、「公大無多言」に於ては寛容なる可き九州兒、何れもが此の「べい」言葉許りからは西國的の香を到底拗し得ないであらう。

式亭三馬事菊地泰輔(安永四(一七七五)生)は、間接にしてもその「狂言田舎操」(文化八年)卷之上に於て江戸者の人形遣なる木偶藏をして上方者の淨瑠璃語なる旅籠太夫に向つて切らず啖呵の手前からも當然想像はされるが、例へば文獻書院の「江戸文學講座」第七冊(昭和五年八月)で藤井紫影博士がその「江戸文學概説」に於て記される(二六一頁)

(略上) 且つ三馬はその言語をうつつすここの巧であること、(略中) 一九よりもまさつてゐる

ミ云ふ批評は、無論方言や隠語に就ても確かに該當する筈であつて、更に谷川十清の「和訓葉」首卷(安永六年)の「大綱」に見える「田舎こいばには濁音多し」云々なぎの補正も見做す可き彼が「癩疹與海鹿之辨」(享和三年)の中で

(略上) すべて東奥の人言語鼻にかゝるがゆえに、五音律呂の開語わるくて、はしかもあしか聞ふるなり、國々の方言さまざまにて、一ツ二ツを爰にいはず、びるばちぎんぼうがにげへるミ、清濁わからぬ言もあり、江戸から一夜に乗附る、眼ミ鼻の間ですら、ふき窓のふぼを、ふつばるなく、こいふにふつばつたから、本がらふつ切たこいふがこいこく(略下)

なる記述は同年に著された前掲一九の「東海膝栗毛」後編凡例に比較して見るミ一段の進歩ミ評さなければならぬのであり、更にその文化三年(一八〇六)の筆になる遺稿「潮來婦誌」後編凡例に於ては北總左原の方言描寫に關す

る細かな觀察が覗はれ、殊に

常の「い」にては通例の濁音にまきはしければおの／＼「ゐ」斯のごとき白濁を點じて「ぢ」ト「が」ミの二濁を分り

就中「がぢぢけぢ」の音に清音の濁たるもの多し又「タチツテト」の音に清音の濁あれども是は「だぢづでぢ」如斯黒圈を用う。餘は推してしるべし

帝國文庫「三馬傑作集」(明治二十六年)七二八頁

ミ云ふ用意に至つては最早單なる市井戯作者流の態度ミは稱し難く、是は例へば吉澤博士が「國語國文の研究」の「本邦音符考」(明治三十七年)に於て(六頁)指摘されてゐる「浮世風呂」前編の凡例よりも三年以前の事であり且詳細である。三矢重松博士が「莊内語及語釋」(昭和五年七月)の序に於て東條操氏に由り指摘紹介されてゐる同時代の氏家剛太夫の「莊内方言攷」を除いては、外國語に對してさへ例へば矢張り同時代の上原熊次郎や一世紀前の雨森芳洲は此の點恐らく記録の不精ミ云ふよりも觀察さへ怠つて居たかも知れず、維新以後に於ても朝鮮語は前開恭作氏が「韓語通」(明治四十二年)に於て叙述された(九頁)以來は退歩の形も見られようし、例へば「音聲學協會會報」第四號(昭和二年五月)に於て(四頁)

一般の内地人は、その音に對して殆ど聾啞も同様ではないかと思つてゐます

ミ云ふ思想は勿論獨り伊波普猷氏に初めて待つ譯ではないが、兎も角「岡倉先生記念論文集」(昭和三年)に於て金田一京助氏も漸く「アイヌ語清濁考」を發表された日本人の言語意識へは、佐久間鼎博士が「日本音聲學」(昭和四

年)で爲れた移植紹介(一四五—八頁)位も仲々行互るには時日を要しようし、目下の論述の中心點を稍々遠ざかる形になるが、日本に於ける韻鏡學——最早生命ありきも見えぬ悉曇學は暫く措いても——なき、殊に泰西の印歐語音韻論の體系を想ひ比べるに、國語史に於て時に或は齧以上の何物でもないのか。自分には映するのであるが、問題を小さく構へて實在的國語を文字に寫し傳へた——文學的には寧ろ下らない事かも知れないが——人として、蜀山人を除いては、三馬は江戸文學に於ける唯一的存在にしても不可無かる可く、殊に此の點「物類稱呼」が或は虎之巻ですらあつたかも知れない一九に對比して格段の眞劍味が看取される事は何人も首肯する所であらう。彼に吾人が求め得られる資料は既翻刻物に即して僅かに四種の滑稽本を擧げ得られるのみであつて、而も量的には何れも僅少である。

「戯場粹言幕之外」(文化三年)卷之上に於て百々九十九及び生貫木俣はらねきまた呼ぶ二人のお國侍が出現して何れも七回宛筑後、肥前、北部肥後を覺しき西國方言を使用するが、巧妙に寫生されてあり、殊に百々九十九が三回目さんびもくに發する

アノ三升さんしやうの付たつきが團十郎だんじやうでござつすたい

なきは大に賞す可きであつて、例へば

行かんいき。(行かないの)

良かよき。(良いの)

の如く本州方言の助辭「の」に當る所へ「き」を用ふる九州方言特異性は彼に由つてのみ寫傳されたを謂ひ得ようし、終止形なるに「ござす」にしてないのも或は國語史上の貴重なる記録であるかも知れない。因に何でもない様な

點でも、今迄の所唯一の翻刻たる文藝書院の「滑稽文學全集」第五卷（大正七年）には（八〇頁）「物類稱呼」「膝栗毛」流に何れも九十九が二回發してゐる言葉だが「なじい」ミ出てゐるのなごは總じて原作者の少からざる苦心が全く壞されてゐる一例であつて、即ち雜誌「國語・國文」第貳卷第壹號（昭和七年一月）で「三馬の藝術」鑑賞の途次此の作品の九州なまり含入存在を指摘される（一八九頁）額原退藏氏の原本調査報告に由るミ、果して是は翻刻者の賢しら立であり、原本には三馬の他の作品翻刻に見える通り矢張り「なじい」ミ九州式發音が忠實に記されてゐるのである。

「譚たん浮世風呂」前編（文化六年）卷之上「晝時の光景ひるまぶら」の所に描かれる西國者の言葉は、丁度其處へ組合はされた上方辯に比しては勿論落ちるが、その「ナイ〜」（ハイ〜）ミ云ふ肯定の返事だけに即しても前記作品に於けるミ同じく所謂代表的地方のものミ目す可き六回發される西國語は矢張り缺點の極めて少きものであつて、九州語の一標識にも算ふ可き「如ごと」（様に）なご一九の西國語では未だ全然出現してゐない點を看過してはならないし、同じく方向の手爾波に「さなへネ」（へ、に）を用ひず「さ」ミしてゐる所なごも彼の徳川初期に一部人士の間に擴まつてゐたらしい「京へ筑紫に坂東さ」なる俚諺は鬼に角、却つて著しく現實味が濃厚である所を買つてやらなければならぬのである。

「素人狂言紋切形しろうと」（文化十一）上編では爺端折姿せんだしの西國侍七八人連が出現する中で角太かくたミ呼ばれる男が一回、無名氏たる三人が一回宛、主人ミ記された者が七回、それに東藏ミ呼ばれる男が是は又「ない〜」許りを八回も出して傍に居た江戸者の訥子民や團十郎松の批評に上る光景である。主人の言葉でも

あやにくおめにかゝりまつせん

お出がならば、お待申まつするに

の如きは、その細かい音聲描寫を味ふ可きであり、「せ」に「しゑ」を傍註したのなごは東北辯に於ても彼が見せてゐる手法であるが、「まつする」は國語史資料にしても例へば「放送講演集・九州方言講座」の「九州方言講座の後」にへ(一〇七頁)一傍證たるの價値を有するであらうし、同じく「昨日つた」(昨日は)「今日た」(今日は)の如きも眞實の寫生かそれとも狂言記の模倣か、輕々に看過し難い資料であらうと思ふ。

「有情大千世界樂屋探」(文化十四)初篇卷之上に於ては何れも江戸方言を用ふる俵の軍兵及びきいたふうの軍兵に交つて所謂西の軍兵が四回程筑紫言葉を語つてゐるのであつて、

何爲打斬んな、早う討つしやア直實殿、おれごもなら忽ち討取るたい、弱か事く

なごこしてゐるが、是の方はその記載された方言文例からも容易に聯想される「浮世風呂」の西國者以上には言葉に就ては何等の新趣向は盛られて無い様だ。只小五月蠅い事を書き添へる様だが、博文館「帝國文庫」第三十篇(昭和五年)「東海道中膝栗毛」の「解題」で(一三頁)三田村鳶魚氏が

(略上)それを熊谷の坂東音、在所言葉、敦盛の京辯を其の儘に口語體に書き移して對照させもした(略下)

と書かれてゐるのなごは、兎も角江戸っ子の腦裏に於て九州語が現在に於ても普通に受けてゐる待遇の好標本であつて無理はないにしても、此の「在所言葉」は當然「筑紫言葉」を改む可きであり、即ち本作品に於ても三馬自身明らかに熊谷の坂東音を西國語と等しく所謂「ごさ(道者)言葉」「もさ言語」なる概念に従屬せしむ可き事を主張して

るるのである。

三馬の門下に當る瀧亭鯉丈事池田八右衛門(安永六(一七七七)生 天保十二(一八四一)歿)の滑稽本二種に於て何れも筑後柳河方面のものは勝るが質的には劣る様に思ふ。尤も内容的にも寧ろ三馬よりも複雑な長文をあつたものも想像され、勿論一九の西國語は段も違ひ、三馬に次いで吾人の参考にす可きものである。

「花曆八笑人」初編(文政三年(一八二〇))の卷には筑紫に通はず筑四郎と筑後に語呂を合はず筑五郎との二人の西國侍が道灌山で前者は十回、後者は八回、何れも巡禮姿の左次郎及び出目助と問答があり、そして飛鳥山で更に是は二人の何れも分らぬ筑紫方言が二回出てゐる。二人の侍の言葉はその名前から各々多少九州の中でも地方を異にする様な聯想は起らぬでもないが、言葉からは全然さる區別はして居らず——又出来る筈もないが——只お國訛丸出しの中にも侍である爲漢語を多く混入してゐる上に幾分標準語化して見えるし、「日本名著全集」(同刊行會) 江戸文藝之部第十四卷「滑稽本集」(昭和二年)に於ける山口剛氏の「解説」に由る(六五頁)作者は柳河藩士をモデルにしたらしい事が想像される。「筑五」を寫すからには

壹人ひとりツツ試みませう

重かさねて貴顔の得ませう

は「まっせう」をしなければ物足らず、手雨波も例へば目的格には「を」の代りに「ば」をす可きを一向氣が付いてゐない様な所なき、さうしても矢張り他國人の作り上げた方言だと思ふ。

「柳髮浮世床」三編(文政六年)は、師匠の筆になる二編(文化九年)の後を嗣いだのであるが、此の下巻を通じて名前の文字に少し新趣向を加へた築兵衛と稱する年齢や着付さては人相さへ詳しく描寫された勤番の九州侍のお國手形が面白く寫し出され、その鬢五郎と廿六回、傳法らしい状吉と一回、鬢五郎の女房お吉と一回受け交はす九州語は矢張り柳河藩のものにしてある心算らしい事は、話題に上るその同役の姓名からも聯想される。「柳川」なきに寫してゐる割に接續詞の使用は大分拙劣であつて

イヤたて板へ水の流る、ごごく。

マヅそれはよけれども。

の如き標準文語體は實に其の他では

ひたすらなげきおるゆゑ。

をも算入するに總計廿七回も「ゆゑ」を連發する様な結果となつて居り、是は合成句にしても四回出て來る

事ぢやるツケン。

と同じく全部「ケン」を改む可きである。

一筆庵(主人)事池田義信(寛政四(一七九二)生)の滑稽本二種に出る是亦何れも侍の驅使する言葉は、是を作者が意圖した所謂西國のものにして受取る限り、既に日本文學に於ける九州方言の點綴を此處迄概観して來た吾人には最早一顧の價値をも有しないと思はれる程、本土的色彩の餘りにも稀薄な姿態を展開してゐるが、吾人は是に對して少く共二箇の見解を取らなければならぬと思ふ。第一には作者が西國語なるものを充分認識して居らず恐らく中國邊の方

言を根幹としてそれに間々九州語の特徴なるものを混じて作り上げた人工語を見る可きで、即ち一見漠然たる意味に取られないことも云へない所謂西國語なる概念に關して、時に等しく「もさ言葉」や「ぎさ言葉」にして取扱はれもした東國邊陲の方言との混同は最早吾人に於ては例外的にして一々觸れる必要は無いにしても、本州西部方言と九州方言との明確なる識別には稍々もする躊躇の態度を示したがる一部人士の知識を此の際整理反省せしむ可き寧ろ得難き好資料であるのである。第二には現代に於ても各種の實例を見るが如く、著しく標準語化された九州方言の變態的一例が忠實克明に此の作者に由つて寫された可きで、此の場合には此の言葉に一九ならぬ三馬のそれと等しき實在的存在權を讀者は或は認容しなければならぬ譯になるのである。何れにせよ、此の作者が溪齋英泉なる別號を以て鯉丈の「八笑人」の畫に筆を執つて居り且其の五編（嘉永二年一八四九）刊卷之上を嗣作して居る事を吾人は忘れてはならない。

「魂膽夢輔譚」二編（弘化二年一八四五）卷之上に於て尾花志忠太（まはしのちゆうた）呼ぶ西國侍が店請人粟九郎と廿五回程、糠俵の太守と呼ぶ殿様と四回言葉を交はしてゐるが、細かく見て「チウ」（と云ふ）を廿五回も言はせたり、「いたいて」（致して）「見ゆる」なききはなつて居ても、「ばい」「たい」は全然見當らず、「でエンス」「でエス」「デス」を以て終る事が數回あるし、劍と拳とに係けて

命には別條ないけんだチウ

位では何も九州方言なりと云ふ積極的の特徴はない譯であつて、或は從來殆ど北九州方言でも例の見られなかつた東部地方のものにして——中國地方と差異が比較的に少いから——却て珍重す可き資料かとも思ふこ

ねい／＼

ミ言はせた後へ註して

國とこばにてはいこいふことなり

ミしてあるから、矢張西部方面の九州語が基層に潜在するものミ解す可きであらう。

「勸善稽古三昧撰」(弘化三年)下之卷では古河偏太夫ミ名乗る勤番の侍が豊後路豊延太夫を訪れ、居合はせた出太郎ミ懲惡

二回、太夫ミ十回程問答を重ねるが、此の侍の言葉は前記の尾花志忠太ミ全く同一類型に屬するのである。作者は別

に西國侍ミ云ふ事を明示して居ないが、前記作品に出る數種の侍の言葉ミ比較しても是は強く主張出来るのである。

兎も角吾人は例へば竹本座で上演された梅野下九及び近松保藏の「御陣九州ひこさんごんげんちゅうのすけだち地理八道ちりりはちだう彦山ひこやま權現誓助劍」(天明六年)で中國語の

「てや」は存しても西國語は少しも見られない點なき想起對比するミ、此の作品も捨て難い資料ミなるであらう。

さて以上の外にも殊に寫本で残つてゐる資料は地方に幾多存在する筈であるが、九州方言ミ云ふ註文で臨むミ矢張

り誠に少い様であつて、例へば東條操氏が「日本文學講座」第九卷(改訂新版第十四卷)の「方言研究ミ方言文學」

で報告されてゐる(一七七頁)「梅ヶ枝餅」なる作者年次共不明の洒落本は太宰府附近を描いた膝栗毛物であり其れ

に録された西國語は方言資料ミしては物足りないものであつたミ云ふが、唯一の東大圖書館所藏作者自筆稿本は大正

十二年の關東大震災に由つて焼失し従つて此の資料は今や九州方言文學史には其の題名をのみ残すに過ぎぬ様になつ

て了つた。

茲に今迄列舉した物ミは趣を異にして、生粹の九州人の手になる珍重す可き幕末の九州方言文學資料を展開する事

こなる。即ち一編舎十九なる雅號を以て佐賀藩士の蒲原（土音）大藏（安政四年）一八五七歿が試みた筆のすさび一束である。其の中總じて所謂肥前古書の名を以て呼ばれる資料の中でも最も好箇の文學資料たる「伊勢道中不案内記」なる滑稽本は前編五冊、續編四冊、後編三冊から成り文政年間元起稿三十數年を経て擲筆してあり、恰も十偏舎一九の「膝栗毛」續編完結は文政五年ではあるし又其の雅號一編舎十九からも容易に想像はされるもの、純然たる膝栗毛物であつて、古來佐賀人士に大に愛讀されつゝあつた所、肥前史談會（佐賀市松原町、縣立佐賀圖書館内）が散佚寫本數種を苦心校合の末昭和三年十二月に四六判本文三六二頁の活字にして五百部刊行したが今や絶版となり再版の機を待つてゐるのである。尾崎久彌氏の「膝栗毛物の研究」（「江戸軟文學考異」所收）には此の資料の存在さへ未だ記載されて無いのは當然であらうが、（佐々木信綱博士 還曆記念論文集 日本文學論纂）（昭和七年六月）へ東條操氏が寄せられた「伊勢道中不案内記につき」なる論文には作者の傳記も紹介されており且一九の「膝栗毛」の對比や影響迄詳説されてゐるので今此處へ改めて繰返す勞を略く事にするが、詰り熊本家中の富田愚津郎兵衛が銀作、久米藏、重八の三人を具して伊勢參宮へ出掛け、眞物の佐賀方言の外に上方や江戸の方言が見られる仕組になつてゐるのである。熊本家中としたのは藩侯を憚る所あつての假托であつて、殊に家來達三人の言葉はお國訛丸出しの上に、主人公愚津郎兵衛の四角張つた物言ひも時に得易からざるお里を混へてゐて、敢へて幕末さしなくても絶好の佐賀方言資料であり、江戸人の大部分の架空的西國語を彼是對照して見る時種々な産物が得られる筈である。作者蒲原大藏は伊勢へは勿論の事本州方面へも足を向けなかつたさうであつて、初篇序文の終にも

されき居ながらにして、たゞ筆にまかすれば、其國其所の言葉のなまりを知らず、見る人あらば、其罪をゆ

るし給へし願ふのみ

こある通り、例へば大に啖呵を切らせた心算の文吉や吉五郎の江戸辯にも今日所謂「行かず東京」が少からず拾へるのであるが、その代り、否それ位だから作中の佐賀方言は流石に水際立つてゐる言へよう。

今肥前史談會の翻刻書から適宜に實例を僅か許り次へ配列する。欄外にある註は可成的其儘にして本文右側に附する事にする。

夜ニハ 行クヨ  
よさりヤア來るばん

何故  
なしで御座りまするかん

ナイく、こらんくしろもんさん、此のあたりにかしら<sup>頭</sup>さんゆふ所は御座らんかん

アアせ<sup>五月 婦イ</sup>からし、いつちよ<sup>モ分ラ</sup>でんわ<sup>ナイヨ</sup>からんばい

見えまつせん<sup>様</sup>ごたる

厭ッテ居<sup>ロ</sup>、夜分ニ指カセルカラ  
ようし<sup>シ</sup>こらい、よさりう<sup>テ</sup>だか<sup>ス</sup>するてえ

こり<sup>少</sup>やちつ<sup>シ</sup>こ<sup>テ</sup>ばかり<sup>ニ</sup>ない<sup>シ</sup>さん<sup>ヲ</sup>取り<sup>テ</sup>ござい

ああせ<sup>老</sup>からし、このう<sup>老</sup>ほ<sup>腰</sup>う<sup>腰</sup>さん<sup>腰</sup>なア、老<sup>シ</sup>老<sup>シ</sup>ば<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>ん<sup>ナ</sup>さい<sup>ナ</sup>いた<sup>サ</sup>か<sup>ツ</sup>かん、アアせ<sup>シ</sup>からし、おら<sup>喫</sup>び<sup>キ</sup>まつ<sup>マ</sup>する<sup>ス</sup>ばん

此堂の前の廣さ三段<sup>ノ</sup>かしら<sup>ノ</sup>もあら<sup>ウ</sup>う<sup>バ</sup>い。

太神宮<sup>廣</sup>さん<sup>大</sup>なア、こ<sup>ナ</sup>う<sup>物</sup>だ<sup>ダ</sup>いな<sup>ケ</sup>な<sup>レ</sup>も<sup>ド</sup>ん<sup>レ</sup>ぎ<sup>ド</sup>ん、白木造りに茅葺<sup>オ</sup>き<sup>前</sup>ア、思<sup>途</sup>う<sup>方</sup>た<sup>モ</sup>よ<sup>ナ</sup>い<sup>ク</sup>ざ<sup>ヤ</sup>つ<sup>ル</sup>こ<sup>カ</sup>した<sup>ラ</sup>も<sup>ダ</sup>ん<sup>ヨ</sup>の<sup>ヨ</sup>う

譽め言葉知らぬ事はアあん<sup>ア</sup>み<sup>アル</sup>みや<sup>マイ</sup>ア<sup>ケ</sup>ば<sup>レ</sup>つ<sup>ド</sup>て<sup>オ</sup>ん、わ<sup>ガ</sup>さん<sup>ガ</sup>の<sup>途</sup>ミ<sup>方</sup>つ<sup>モ</sup>つ<sup>ナ</sup>け<sup>ク</sup>も<sup>ヤ</sup>な<sup>ツ</sup>う<sup>ケ</sup>や<sup>ル</sup>つ<sup>カ</sup>け<sup>ラ</sup>ん<sup>ダ</sup>く<sup>ヨ</sup>そ<sup>ヨ</sup>う

右は主として家來達三人の方言丸出しの所であるが、吾人は寧ろ愚津郎兵衛が言葉に興味を有するのであつて

コレく亭主、追付け家來が來らば遣はさう程に駕籠賃を取替へてくれさつしやれ

西國筋の者で御座る

なごは勿論問題にならないにしても

是からが面白い所たん

ハ、ア、大名の奥女中が見物に罷出たさ見ゆる

是はく、又歸りにお世話になりまつせう

イヤく少し急ぎまつしう、所々見物に暇取りました

もうやがて日暮ぢや。よか宿に着けてくれ

の如きは大に味ふ可きであり、何れも東つ兒の文吉や吉五郎をして

マア聞いてくんねえ、わつちや江戸だねえ、(略中)井戸屋文吉さまだ、エヘン、慮外ながらわつちがこつだね

え、(略中)エ、カ、久しいもんぢやが、コウ金の鯉鉢横目所ぢやアねえ

コウ、お前の文でこちらは大騒ぎ、お侍さまが御出家なさるやら、和尚が還俗すやら込んだこつだねえ  
なごにあるのは作者が如何に純粹な佐賀辯の所有者であつたかを立證するものと言へよう。

蒲原大藏の遺著には此の外に寫本が多々あり、何れも佐賀方言の混入すると思はれる洒落本、滑稽本であるが、肥前史談會刊行の「伊勢道中不案内記」の「はしがき」には(一〇頁)

年 中 行 司	二 冊	金びら御利生記	一 冊
古今風俗太平記	四 冊	老もふ雑話	二 冊
七福神評定錄	四 冊	隠れ家の春	一 冊
薬師ちよんがれ	一 冊	田舎狂言幕の内外	二 冊
おごけ敵討	二 冊	町々かざり評判	二 冊
精進物魚類問答	一 冊	佐賀不繁昌記	一 冊
植疱瘡輕安錄	一 冊	おさらば草紙	一 冊
獨問答夢物語	一 冊	當世二十四不孝	一 冊
異船旱魃神評定	一 冊	ひざくりげ後編	二 冊
反魂二世物語	一 冊	神々風災順見錄	一 冊
三法論義集	一 冊	かんたん榮花の夢	一 冊
六韜三略猫の卷	二 冊		

の廿三種が擧げられてあり、同好者今後の研究資料として記憶す可きものである。

最後に江戸文學口語資料としての人情本なごに九州方言の斷片をでも求めるのは、寧ろ滑稽ささへ評されるかも知れず、而して曲亭馬琴が讀本「椿説弓張月」(文化三十七年)や奈河晴助が「傾城筑紫鞆」(文化十二年脚色上演)さては柳亭種彦が草雙紙「出村新兵衛しんべゑ七鯨帶博多合三國」(文政五年刊)、更には種員・種彦・種清に由つて物された

「白縫譚」（嘉永二—明治十六年）の如き、題名だけでも西國に關係するものを文學の種類に關せず列擧するのは吾人本項の論究對象で無い事は當初既に斷り書をして置いたのであるが、徳川期文學を終るに際し殊に中央の人々に一參考資料を左に呈示する。

それは福岡の歌人大隈言道（寛政四（一七九二）生 明治元（一八六八）歿）の數多い短歌の中に意識的、無意識的な俚語要素混入が僅かながら見られること云ふ事であつて、春日政治教授が雜誌「能古」第二卷第八號（昭和五年八月）の「雲出鳥遠處漫談」で摘出された廿數種の中から數例を並べるこ

梅が香は つまぎのかげに 隠るめり あくこせくきに いつもにはへば

行くままに 寂しくなりぬ 里はつれ まばらに家も 細くなり來て

なぎに於ける「せく」（閉づる）や「細き」（小さき）の如き單語、さては

そばだちて 恐ろしげなる 嶺越に またゆたげなる 山も見えけり

窓に來て 繩るささきも ゆくりなく あわただしかる 木枯の風

散ればこく 水に浮べて 行く花に しねば身をやる 野べをこそ思へ

なぎの語法に於て、獨特ミは勿論言へなくとも可なり豊かな地方色を漂はす作例が擧げ得るのである。尤も是等は所謂方言歌ミ稱する部類には算入來難い様であつて、方言味の乏しいのに何時も失望させられる俚語、民謡ミ趣を同じくすることも考へられるから、例へば東條操教授が改造社の「短歌講座」第十卷「特殊研究篇上卷」（昭和七年五月）に於ける「方言ミ和歌」で（二八七頁）

(略上) 嚮覽や言道や良寛の如き人々も俗語はかなり自由に入れてゐるが方言を驅使する事はしなかつた  
こされてゐる見方は左程牴觸する性質のものでもなからうが、九州各地方の方言歌謠類の結集は何れも明治維新以  
後、それも大部分は近來の方言熱に押されて實行された様に思はれるし、従つて是は便宜上次の段落に於て一括する  
事としよう。

〔此項未完〕

興へられた頁數に制限のある爲、殘餘の十餘頁は遺憾ながら本誌次輯へ廻す事にした。従つて本稿前二回に對する補正も其の時  
一緒に行ふ事にする。

(昭和七・九・十)